

織豊期豊後における本城－支城体制

一五八七年から一六〇〇年までの流れ

杵築市教育委員会

福永素久

1、はじめに

大友宗麟・義統父子は、天正六年（一五七八）に起きた高城・耳川の戦いにて敗退した。それ以降、島津氏の北上（豊薩戦争）や田原氏など領国内の反乱に対処する為、彼らは、抑えるために、府内を中心に城館を整備していったことが、この時期の文献等でわかる。中には、高崎城や鶴賀城（共に現・大分市）、妙見岳城（現・宇佐市）など、天正十五年（一五八七）以降に使われた城郭も含まれていた事が注目される。

豊後における織豊期は、豊薩戦争後の一五八七年～関ヶ原直前の一六〇〇年までをさす。その期間から、さらに時期区分を大きく二つに分ける事が可能だ。即ち、①大友義（吉）統が統治していた一五八七～九三年、②大友氏が豊後除国となった後、豊臣家蔵入地から織豊大名が各地に入った一五九三～一六〇〇年の二時期である。

その期間に豊後周辺には、九州国分直後から中津城をはじめ石垣・瓦・礎石のいわゆる三点セットをもった城郭が新規や既存の城郭を改修して築城されるが、豊後一国を保障された大友氏領国内では、

新規に築城をせず三点セットも使われていない。つまり土作りの城を展開しているのが特徴だ。

文禄二年（一五九三）の大友吉統改易後、豊後は一国全体が豊臣家蔵入地になった後に国内各地へ大名が入ったことで、石垣作りの城郭が展開することになる。一方で、送られた大名の平均石高が六～三万石以下なので、殆どが本城－支城体制を形成することはなかった。今回は、支城体制を敷いたと考えられる、竹田中川氏と豊後高田にいた竹中氏の事例を述べたい。

この織豊期豊後における、城と都市との関わりを述べた先行研究が三点ある！

須藤端氏は、本誌において大友義統の城郭政策を紹介した（須藤二〇一一）。氏は、豊薩戦争後の豊後で義統がどのような城郭政策を行ったか、豊臣秀吉が弟・秀長に宛てた朱印状を中心に論を展開した。その中で義統は、戦乱や地震で荒廃した府内に代わる拠点として鶴崎を選び、鶴崎からも一望できる高崎城・鶴賀城が支城として改易まで残ったと氏が推測した。

田中裕介氏は『大分県地方史』第二二四号にて「熊本藩領以前のつるさき」を発表された（田中二〇一五）。内容は、須藤氏の論考でも言及があったが、吉統が文禄の役にさきだつて、嫡子義述に対し、鶴崎に豊後に留守していた家臣の屋敷普請と上洛中の家族を呼び寄せるように命じている（「大友吉統室家番衆交名」²）。また、

吉統に従軍する家臣は鶴崎より乗船して朝鮮へ向かった事から(「安東統宣高麗渡唐記」³⁾、氏は府内に変わる新たな拠点として鶴崎をあげた。

小柳和宏氏は、二〇一七年に『大分県立歴史資料館紀要』において「大分県における織豊期城郭の動向を発表した。その中で氏は、境界争いの係争地であった黒田領との接する場所で、妙見岳城や高山城など大友が積極的に城の改修が見られると指摘した。一方で前述のように、黒田氏が築城した中津城や支城として改修された平田城のように、三点セットが揃った大友の城郭では用いられなかったと指摘している。

ここで配置と着目すべきは、城郭のあった政策的な関連と場所、街道・港・渡河点等の立地の関係である。そこで立地の視点から、大友氏から織豊期の各大名が豊後へ入っていく中でどのように、本城―支城が整備されていったか見ていきたい。

2、一五八七年豊薩戦争後の体制

織豊期における、大友氏の城郭政策の基本となる柱は二本あった。一つは、豊臣秀吉の朱印状だ。

これは天正十五年(一五八七)の九州国分直前、秀吉から弟・秀長へ朱印状が五月十三日付に出された。十四カ条からなる史料の中には、豊後の城郭政策が書かれている。そこで「志賀太郎・佐伯入

道太郎兩人無比類致働：兩人に日向国にて為褒美一城、とらせ」(八条目)とあり、次に「豊後国にて、去年以来表裏を仕候者之儀ハ、城を請取可致破却：」(九条目)とある。実際に大友氏は日向を受け取っていないが、文中から志賀(岡城か騎牟礼城)と佐伯(母牟礼城)の拠点城郭は保障されていたようである。

そして「備前少将(宇喜多秀家)・尾藤左衛門・黒田勘解由(孝高)・蜂須賀阿波守(家政)右之者共として、日向・大隅・豊後城普請可申付候、併不入城ハわらせ可然事」とある。

二本目は、吉統の父である宗麟の頃から使われた城督制度である⁵⁾。戦国期において、立花山城(福岡県)など大友氏の拠点となる城郭には、この制度を使って有力家臣を配置した。また鹿鳴越城(日出町)や妙見岳城(宇佐市)などの他の城には、直轄地にいた武士団を利用して城の改修(城誘)や在番を命じている。その舞台となった城郭が、立地や統治の関係において、秀吉の朱印状とリンクする箇所がいくつかある。

また、一五九一年以降の秀吉発給の朱印状で「羽柴豊後侍従」や一字をもらい「吉統」宛てに送られた史料が見られる。こうして、豊後一国を保障された義統は織豊大名大友吉統として豊臣政権による制約の下、大友氏の拠点城郭を基本とした統治制度である城督をベースとした。この二つの柱を基に、吉統は支城に相当する城郭を整備する事になった(図1)。

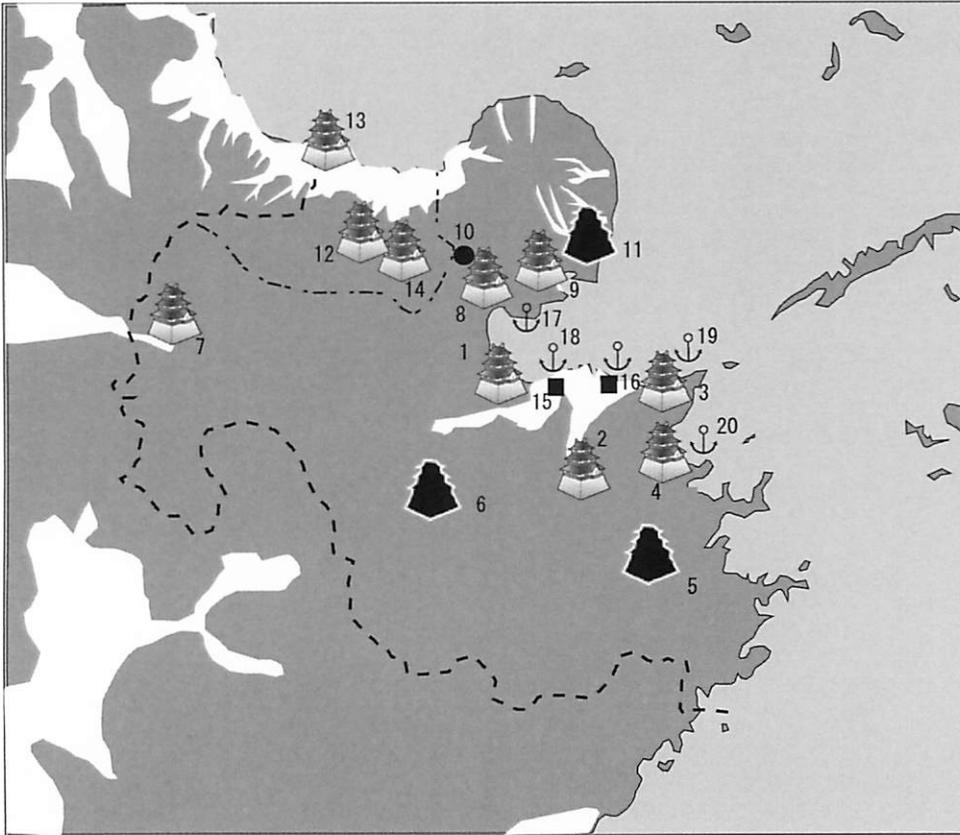
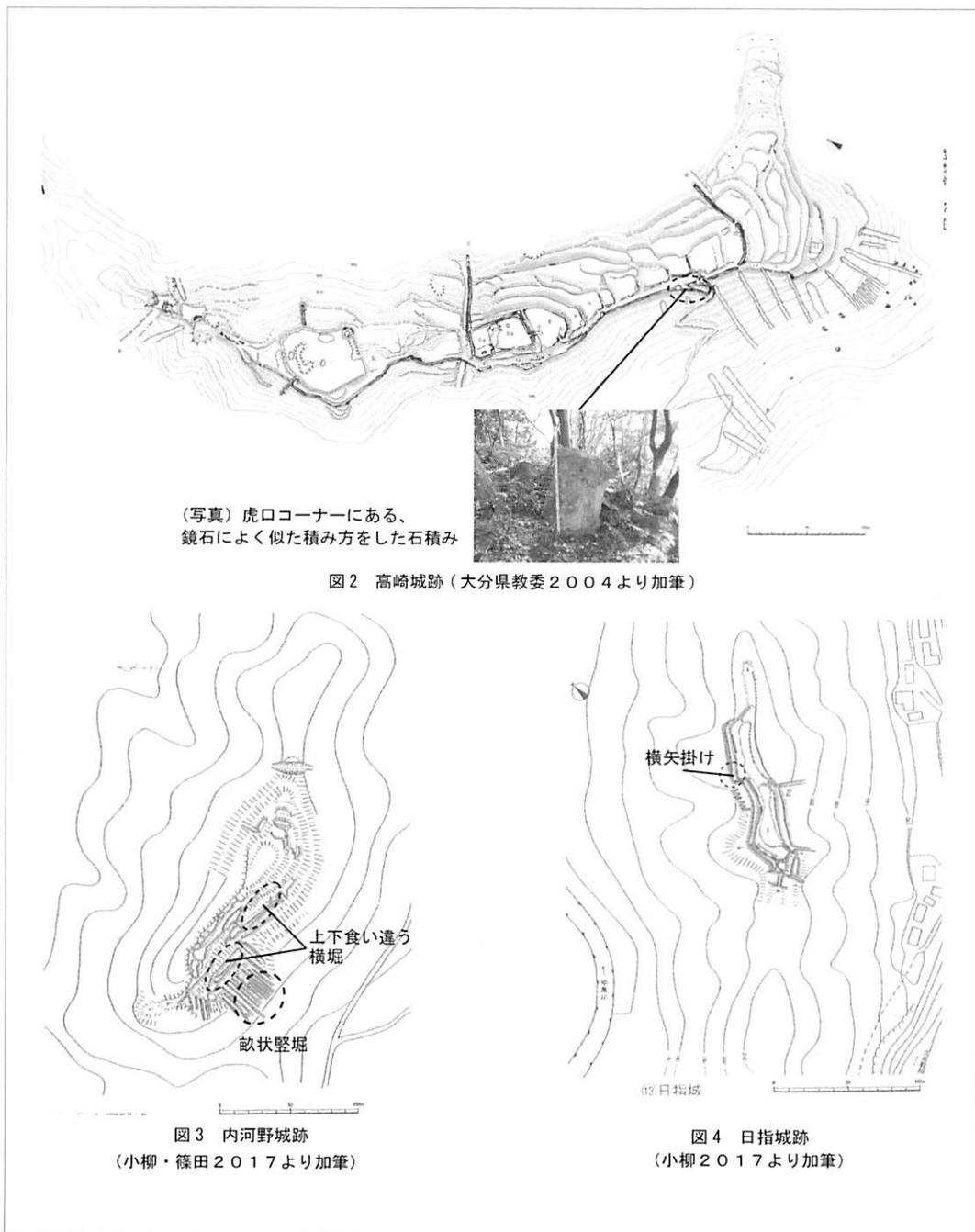


図1 城郭配置図 (1587～1592年)

 拠点城郭
  大友家家臣の居城
  都市
  港湾

1. 高崎城 2. 鶴賀城 3. 烏帽子岳城 4. 丹生嶋(白杵)城 5. 柵牟礼城 6. 岡城 7. 慈眼山遺跡(大蔵古城)
 8. 鹿鳴越城 9. 台山(木付)城 10. 内河野城・日指城 11. 安岐城 12. 妙見岳城 13. 中津城(黒田氏本城)
 14. 龍王城 15. 府内 16. 鶴崎 17. 日出 18. 沖の浜 19. 佐賀関 20. 白杵



(1) 大友氏本拠の城郭

ここでいう、大友氏本拠の城郭とは史料上(九州国分以前)で一番を置いたものを指す。

その頃、大友氏の本拠は豊薩戦争以降再び府内から、義統が臼杵に宗麟が津久見へ移っている⁷⁾。一方でその後義統は、本拠を大友氏が重要拠点の一つと考えた鶴崎に移そうとした動きもあった。

府内のすぐ西にあった高崎城(図2)は、豊薩戦争以後文献には出てこない。城は「四極山」とよばれ、ほぼ全方位をカバーする事が可能である。よって改修は史料では確認できないが、後述する改易期まで利用された可能性が高い。一方で、高崎城には虎口や周囲の櫓台に、同時期の織豊期以降の石垣に見られる、鏡石のような積み方をしたものがするなど「石垣の城」を指向したプランが見られる。

それと同じくして、府内の南側にあり臼杵との中間点に位置していた鶴賀城は、豊後南部との連絡路で重要な位置にいた。鶴賀城は豊薩戦争の時に、大幅に改修された事が文献から窺うことができる。島津軍の侵入ルートに合わせて、連続した堅堀や横矢掛りが主郭を中心に展開した。

このように考えると豊薩戦争後、改修の記録はないものの秀吉の朱印状に出てきた支城の条件や立地の関係から、国内にあった城館は豊後除国まである程度残っていた可能性が高い。

一方で、北側の豊前黒田領との境を接する速見郡山香郷や豊前の大友領内では城の改修が積極的に行われた事がわかる。黒田氏と大友氏の間では、豊前-豊後の境目論争が度々起こり、豊臣秀長がその仲裁にあたっている⁸⁾。

彼らの対立を表している史料の一つとして、天正十八年(一五九〇)に義統が柞原八幡宮に願文を送った。その内容は「爰に黒田官兵衛近年居住し誠に欺いて悪逆仁、神妙に背かず人心を妨げ恣に振り、吉統もつて誠意と存せずと雖も、至り、豊州非道歴然たり、天下順儀に存ずと雖も、(中略)祈願成就の砌宇佐郡一圓神領せしめ寄納候事必候」と、黒田が豊前で「非働」の限りをつくしている。もし黒田を退治できたら、宇佐郡一円を寄進してもいい、という内容だった。以上の事から、当時政情が安定していた府内周辺と比べて、北部の国境沿いは緊迫した様子が見られる。

恒常性は持たないが、内河野城や日指城(共に現杵築市、図3・図4)は、黒田領に向けて連続した畝状堅堀や横矢掛りなど、今まで大友氏系の城郭では見られなかった技巧的なしかけが見られる。このように大友氏がこの頃に築城した城郭では、横矢や堅堀を多く利用しているのに対し、ほぼ同時期に築城された中津城のような石垣・瓦を用いていなかった。

(2) 有力家臣の城郭

もう一つ秀吉の朱印状では、豊薩戦争で活躍のあった家臣の居城

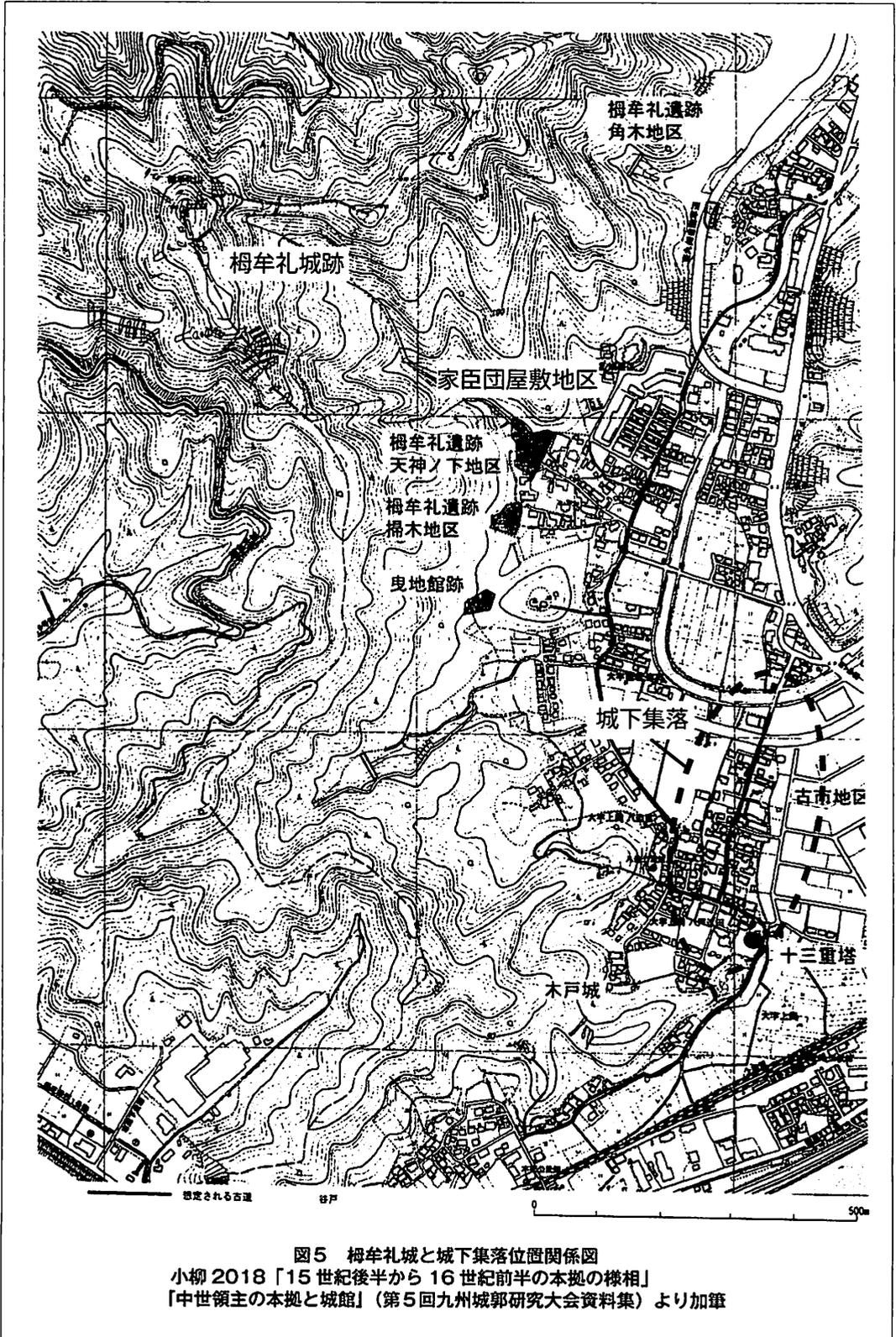


図5 桐牟礼城と城下集落位置関係図
小柳 2018 「15世紀後半から16世紀前半の本拠の様相」
「中世領主の本拠と城館」(第5回九州城郭研究大会資料集)より加筆

は残すとあった。その一例として、佐伯氏を事例に出したい。佐伯氏は、以前大友氏に反乱を起こし弘治二年（一五五六）に佐伯惟教が伊予へ逃亡した。惟教は永禄十一年（一五六八）に宗麟の許しを経て、大友氏の直轄地で貿易港だった佐賀関烏帽子岳城（大分市）に軍監として入った¹⁰。天正十四年（一五八六）の島津軍侵攻時は、本来の本拠であった榑牟礼に帰っている事が、各史料からわかる。

朱印状から名指で出てきた佐伯氏の居城榑牟礼城（現佐伯市）は、番匠川左岸に位置する山城である（図5）。近くの小田山城とともに畝状堅堀や大きな堀切をもつ。时期的には、小田山城の方は榑牟礼城と比べて築城時期が下る。しかし、島津侵攻時の史料にも榑牟礼の名が出てきているため、城は使われたのであろう。

麓には、居館にしていた曳地館があり、後に麓は東九州自動車道の工事に伴う発掘調査が行われた。調査では、家臣の屋敷と考えられる方形区画の居館跡や町屋跡が検出されており、城下集落が形成されていた事がわかる。

3、大友氏除国後の体制

文禄元年（一五九二）から始まった文禄の役で、大友吉統は派遣先の朝鮮半島での失策により、大友氏は改易となった。豊後は国全体が豊臣家蔵入地となり、北部に宮部継潤と南部に山口玄蕃允がそれぞれ検地奉行として派遣された。その後文禄三年（一五九四）以

降に、秀吉の子飼いの家臣が大名として各地に送られた（図6）。

彼らは、既存の城館を改修し周囲の集落を惣構で城下として取り込んだ。改修された城郭の一部は三点セットを有していた。一方で、彼らの石高が平均として二万石〜三万石であり、領域も狭いので、本城-支城体制を整備するまでに至らなかつた事例が多い。

その中で、確認されていて本城-支城体制を布いたと考えられる事例が二つある。竹田の中川氏と高田の竹中氏だ。

（1）中川氏の場合

一五九四年に中川秀成が、六万六〇〇〇石で大野郡・直入郡に入部した。中川氏が入城した当時、領内には南郡衆とよばれる旧大友氏旧臣が活動していた。

そこで中川氏は、大友系の紹忍と宗像鎮続を家臣として招いて対処した。志賀氏の拠点の一つだった岡城を中心に、支城を整備していく。

小牟礼城（豊後大野市・図7）は、大野川の支流市万田川と酒井寺川の合流点に位置する。城が位置する場所は、市万田川上流には大友氏一族の一万田氏の拠点があった。そして下流に行けば大野川と合流する。まさに、小牟礼城の位置は大友氏系の旧勢力を抑える位置にあった。

元々中世から戦国期に使用していた城郭を、中川氏が支城として整備した城郭と見られる。城の大手は、市万田川に向いているのが

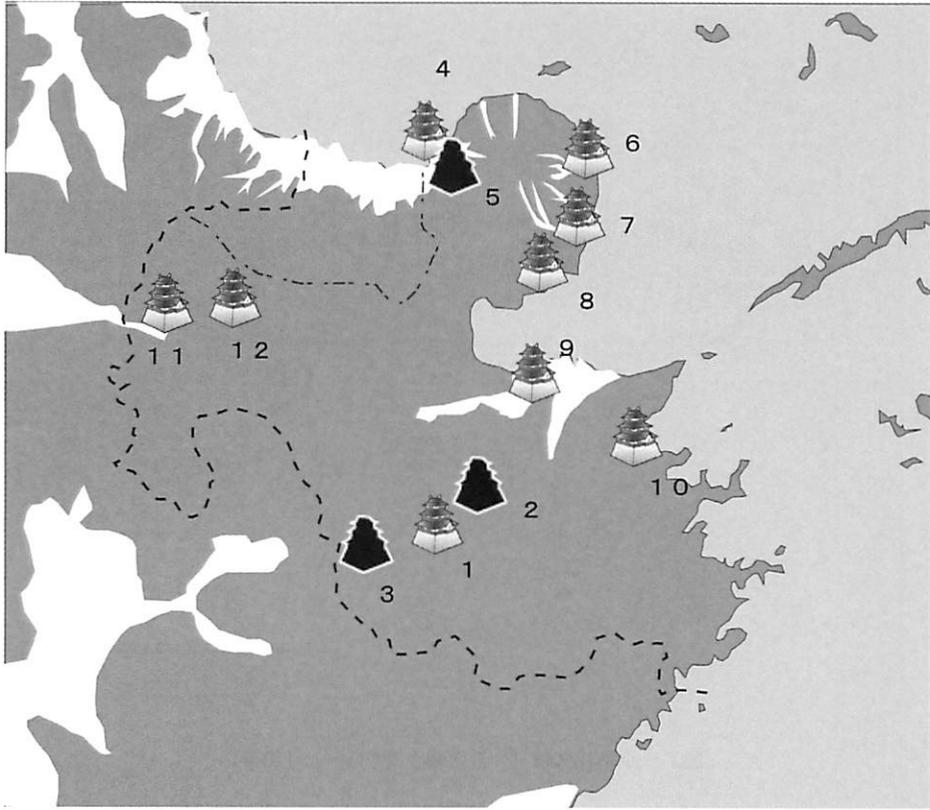


図6 城郭配置図 (1593～1600年)



1. 岡城 2. 小牟礼城 3. 下原城 4. 高田城 5. 佐野鞍懸城 6. 富来城 (垣見氏) 7. 安岐城 (熊谷氏) 8. 木付城 (蔵入地→細川氏) 9. 府内城 (早川氏→福原氏) 10. 臼杵城 (太田氏) 11. 日隈城 (毛利氏) 12. 角牟礼城 (毛利氏支城か?)

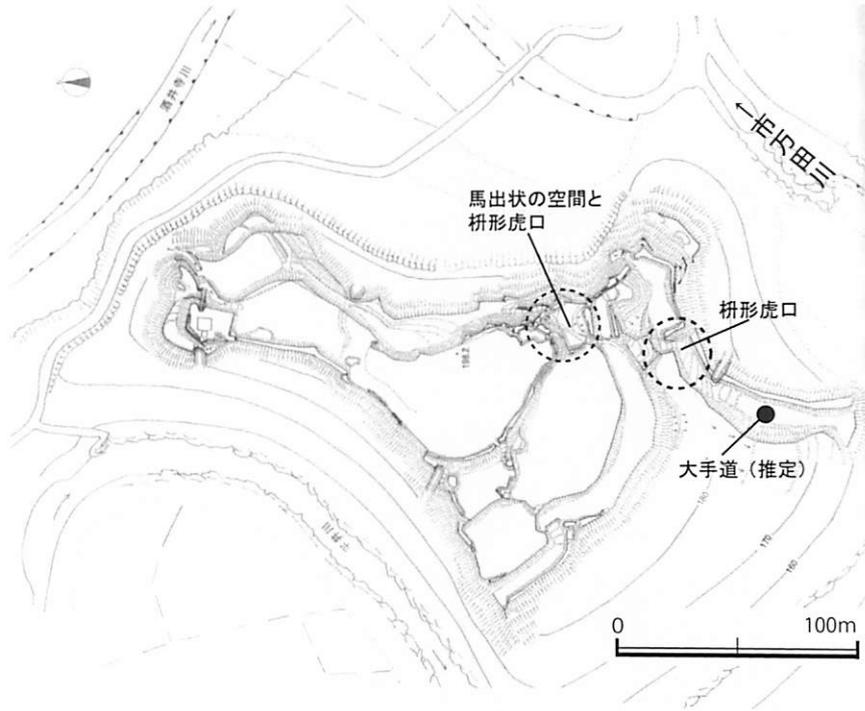


図7 小牟礼城跡 (大分県教委 2004 より加筆)

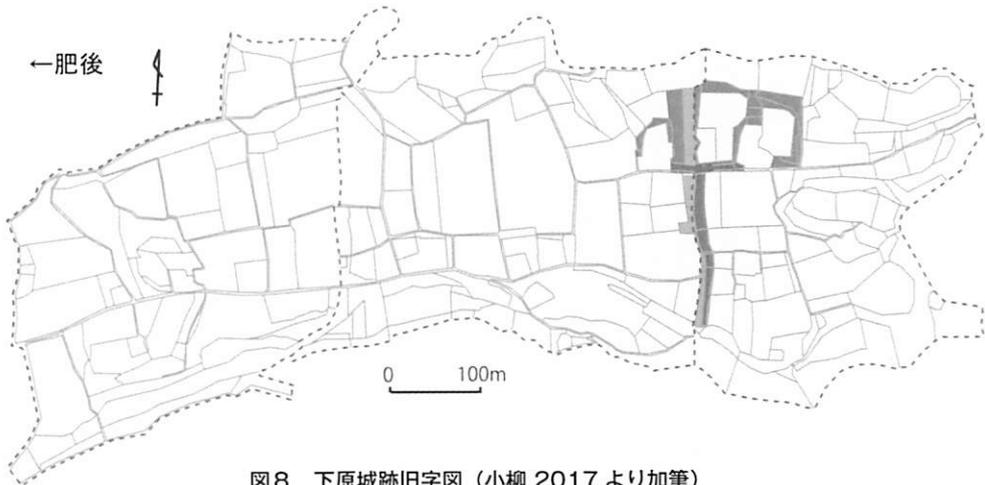


図8 下原城跡旧字図 (小柳 2017 より加筆)

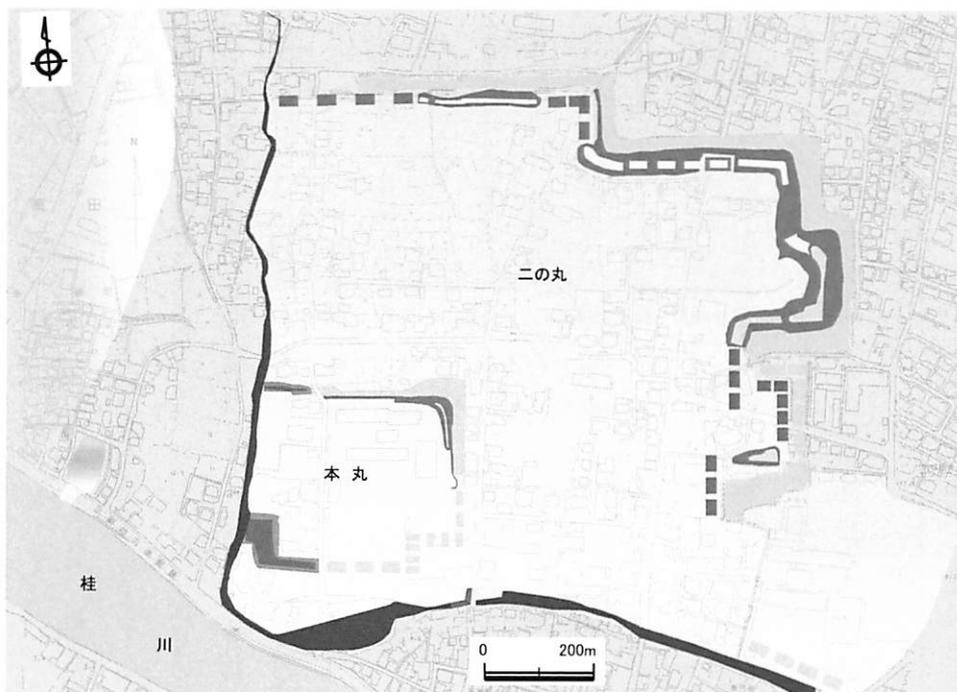


図9 高田城跡 (豊後高田市教委 2019 『豊後高田の城跡』より)

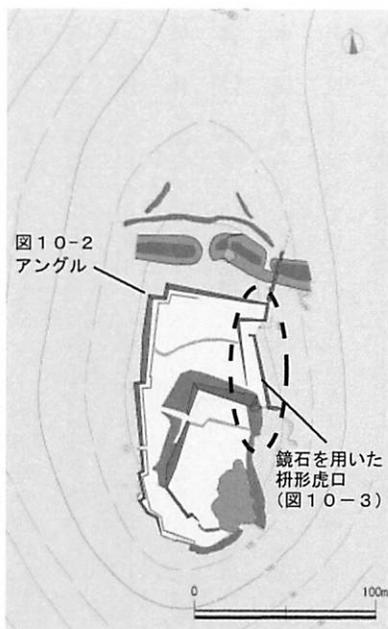


図10-1 縄張り図



図10-2 石垣



図10-3 桁形虎口

図10 佐野鞍懸城跡 (縄張り図は大分県教委 2004 より加筆)

特徴だ。川に向かつて主郭に登るまで、近世岡城と同様の連続した枡形虎口・横矢・馬出が見られる。

前述の通り中川氏は、田原氏を家臣団に組み入れた。紹忍が居城として入ったのが、肥後との国境に近い下原城だ（竹田市・図8）。現状は堀と土塁が一部残るのみであるが、明治期の旧字図によると、丘陵を切断する堀と土塁の存在が確認できる。一方で小牟礼城のように、虎口や横矢など技巧的なしかけが確認できない。田原紹忍は、慶長五年（一六〇〇）の佐賀関合戦で戦死した。おそらく城は、一六〇〇年前後まで存続したと考えられる。

（2）竹中氏の場合

竹中重利は、文禄四年（一五九五）以降、豊後高田の桂川河口右岸にあった高田城（図9）に一万石で入った。江戸期の地誌書である「豊後国史」によると¹¹、城は元々大友氏系の高田氏の居館だった所を改修された。また、慶長三年（一五九八）に「城塁ヲ増築ス東西三町五十五間南北三町十間アリ」とある。

桂川上流には、紹忍から本家筋にあたる田原宗家が拠点に置き天正七年（一五七九）以降、大友氏から離反をするようになった。その後義統により反乱は鎮められたが、文禄段階において田原残党が、国東半島中央部を本拠にしていた。

桂川流域の平野部と、国東半島の山間部の境に佐野鞍懸城（図10）がある。この城は、元々田原氏が拠点にしていた城郭で、高田

より6km上流の川沿いの丘陵に築かれた。城のある場所は川沿い以外にも、高田から川を迂回して田染方面へ抜ける峠道が、城地北側にある。城は河川と峠道を抑える役割があった。

後述するが石垣を用いた織豊期に近い石垣を持ったこの城は、築城主体が誰なのか今までの先行研究ではわからなかった。県の報告書では、中津にいた黒田氏の支城という位置付けがされていた。しかし城がある場所からは、国東半島内陸部に大友家や後からきた大名に反旗を翻していた田原氏本家が拠点に置いていた。以上の事などから、城跡の現況は、竹中氏による改修と見てよい。

山頂にある城跡は、石垣の積み方として形式的に古い野面積みと、従来の在地に近い積み方を利用した石垣が積まれている。また川沿い、つまり見える方向と反対側にある枡形虎口には、鏡石が用いられていた。一方で表採においても、瓦等は見つからない。

一方で、一五九五年以降に重利が高田に入ったと記している「豊後国史」の内容をそのまま信用すると、一五九八年までの高田に築城される間、竹中氏の本拠はどこだったのか。そこで当初重利は佐野鞍懸城を本拠として改修し、九八年以降に高田へ本拠を移した¹²。その後、城は高田城の支城として利用されたと推論できる。

したがって、少ない石高であるが支城を形成した事は、大友氏改易後の織豊期豊後における、この地域の情勢を表しているといえる。

さらに、もう一つ本城―支城制度を布いたと考えられる地域とし

て、日田・玖珠郡にいた毛利氏がある。毛利高政は、日隈城を本城とし、角牟礼城（玖珠町）を支城として置いたと思われる。しかし角牟礼城跡の山上部に残る石垣は、高政期と考えられていたが否定的な意見もあるため、検討を要する¹³。

4、おわりに

一五八七年以降の豊後では、豊臣政権下に入った大友氏によって城割りが行われた。そして城郭政策には、城督制度という大友氏が豊薩戦争以前から取り入れられていた拠点城郭を中心とした行政制度を戦後も基本とした¹⁴。この二つが、織豊期大友氏における本城―支城制度の原則となった。

そこで一次史料では出てこないが、戦略上で重要な個所や家臣の居城の一部が城として存続した。これが、織豊期における大友氏領国下の支城といえる。高崎城等は戦略上重要な位置にある一方で、府内に近いために一五八七年以降に改修は受けなかった。一方で黒田領に近い場所では、城郭が改修された事例が見られるが残った城の殆どは改修を受けた形跡が見られない。

冒頭の様に、大友領内周辺には中津城のような三点セット（瓦・石垣・礎石）が揃った城郭が成立している。一方で、領国内の城郭では横矢など他の織豊期の城郭に引けを取らない縄張りプランであるのに対し、石垣等を有してなかった。これが、縄張りから見ると

豊期における大友氏系城郭の特徴である。

大友氏改易後は、三点セットが揃った城館が国内に形成されていく。しかし、大友氏旧臣が残り国内が政情不安定な状況で、領国を安定させる事が急務な状況において、十万石未満の大名でも、支城を設置する事例も見受けられた。そこで、旧臣が勢力を置く地域の近くには、小牟礼城や佐野鞍懸城のように支城を整備した。一方で中川氏の場合、田原氏を家臣に組み入れ居城を、他の大友旧臣の勢力圏から離れた場所に入れた事も一つの特色だといえる。

〔追記〕

本稿は二〇一九年九月二十八日～二十九日に行われた中四国地区城館調査検討会徳島大会において、筆者が資料集において紙上報告した内容を加筆したものである。

¹ 他にも中西義昌氏が、一般向けの歴史雑誌『歴史群像』において岡城を取り上げた（『歴史群像』第一三四号、学研パブリッシング（現・学研プラス）、二〇一五年）。氏は、文中で岡城の「張りが、一五九四年以降に竹田に入った中川氏と、南郡衆を中心とする大野・直入郡にいた大友旧臣との緊張関係を表していると、言及された。

² 渡辺澄夫編『大分県史料』三二、一九九〇年

³ 本田美穂「史料紹介『安東統宣高麗渡唐記』（上下）」『研究紀要』

一・二集、佐賀県立名護屋城博物館

4 田北学編増補『編年大友史料』（以下「史料名」）『編大史』（巻二七―五四六号、一九六八年ほか）

5 三重野誠『大名領国支配の構造』校倉書房、二〇〇三年、他に掘点城郭における城普請である「城誘」については、三重野氏の前掲文献と吉本明弘「中世城館に見る大友氏の領国支配―切寄を事例として」『大分県地方史』一八九、大分県地方史研究会、二〇〇三年がある。

6 名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』五、吉川弘文館、二〇一五年所収（以下「史料名」）「豊臣」五―史料番号）、「羽柴豊後侍従宛大仏殿材木之事」（「豊臣」五―二八五、天正十九年正月十五日付）、「羽柴豊後侍従朱印状」（「豊臣」五―四三二〇、天正二十年十一月十日付）ほか

7 八木直樹「十六世紀後半における豊後府内・臼杵と大友氏」『豊後大友氏』（八木直樹編）戎光祥出版、二〇一四年ほか

8 黒外園豊基「国境の村の境目論争」『戦国期在り地社会の研究』校倉書房、二〇〇三年・井上聡「豊前佐田荘と豊後山香郷の境相論史料について」『大分県歴史博物館紀要』十八、二〇一四年

9 「柞原八幡宮文書」（『編大史』）

10 「大友家文書録網文」『大分県史料』三二一

11 文化元年（一八〇四）作成

12 文禄三年以降に竹中氏の本城として、佐野鞍懸城が使われたとなると、附随する城下集落どこかとなる。これは、今後の課題となる。

また、高田城の縄張りが本丸を段丘先端に配置して、背後に城下町が広がる形状は梯郭式と呼ばれている。これは、府内城とその城下町にも似ている構造だ。一六〇〇年の関ヶ原の戦いにおいて、当初西軍に似ていた竹中重利は、途中で東軍に加わったことにより、戦後府内へ移った。その時に城下の基盤が完成したことになる（『豊府紀聞』ほか）。これは、未完成だった高田城・城下町の縄張りを府内にて踏襲したといえるのではないだろうか。

13 本丸がある山上部の石垣は、通説によると高政期によって構築されたといわれてきた。これは、一六〇〇年以降に森に入った久留嶋長親（康親）が山上部を放棄して麓に陣屋を構えたからだ。しかし、寛永期に細川忠興の助言により、山上部の櫓を取り壊したと伝えられていることから（『秋山家文書』）、山上部の石垣は久留嶋氏による構築も推測される。また木島孝之氏も、築造は久留嶋氏によるものと言及している（木島「角牟礼城高石垣―毛利高政期構築説を問う」『城館史料学』六、城館史料学会、二〇〇八年）。

よって、角牟礼城が毛利氏の支城だったか、確証するには検討を要する。

14 地域支配において、支城を中心とする行政と軍制を兼ね備えた城督制度は、近世初頭の支城制度と似ていると筆者は考える。大名の

領国内で、家臣が全く地縁と関係ない地域に入り行政を執る。一方で、史料でも見られるように、城には地元武士団を利用して、城の在番や維持管理する様子は、近世において制度化された「備」に通じるものがあるからだ。一五八七年以降、戦後処理にあたった大友義統は、残った領国をいち早く復興させるには、城督制度が上手く対応しやすいシステムだったといえる。

参考文献

- ・大分県教育委員会「大分の中世城館」第四集総論編、二〇〇四年
- ・小柳和宏「大分県における織豊期城郭の動向」『大分県立歴史博物館紀要』十八、二〇一七年
- ・小柳・篠田健司「黒田氏VS大友氏」それぞれの城郭はいかに配置されたか」『北部九州中近世城郭情報誌』三二、二〇一七年
- ・下高大輔「織豊系城郭の支城、そして考えるのか」城郭遺構論の現状と課題」『織豊期城郭』十二、織豊期城郭研究会、二〇一二年
- ・須藤端「九州征伐後の城郭政策」『ゆけむり史学』五、別府大学大学院文学研究科歴史学専攻、二〇一一年
- ・田中裕介「熊本藩領以前の「つるさき」」『大分県地方史』二二四、二〇一五年